様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　３月　３１日現在

機関番号：84604
研究種目：若手研究（B）
研究期間：2007～2010
課題番号：19720213
研究課題名（和文）　銅鏡にみる古代東アジアの文化交流

研究課題名（英文）The cultural interchange of ancient East Asia seen from bronze mirrors.

研究代表者
中川　あや（NAKAGAWA　AYA）
独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員
研究者番号：10393373

研究成果の概要（和文）：9～12 世紀にかけての東アジアの文化交流の一側面を読み解くため、出土銅鏡を対象に考古学的分析をおこなった。中国大陸では国家の興亡に応じて多様な銅鏡文化が展開した。韓半島では中国大陸と日本から鏡を受容し、独自の鏡と合わせて融合的な文化が発展した。日本では中国大陸、韓半島からの影響を受けず、唐鏡様式を追求した独自の銅鏡文化を固持した。本研究は古代東アジアの鏡を初めて総合的に比較した研究として評価できる。

研究成果の概要（英文）：To resolve one side of a cultural interchange of East Asia in 9-12 century, I archeology analyzed excavated bronze mirrors. In Chinese continent, there were various bronze mirror cultures on the rise and fall of the nation progressed. In Korea peninsula, they received mirrors from Chinese continent and Japan, and developed united mirror culture with original Korean mirrors. In Japan, they wouldn't receive mirrors from Chinese continent and South Korea peninsula, and persisted in an original bronze mirror culture that pursued the Tang Dynasty mirror style. This study is appreciable as the research that compares mirrors of ancient East Asia for the first time overall.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	800,000	0	800,000
2008 年度	800,000	240,000	1,040,000
2009 年度	0	0	0
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
総　計	2,400,000	480,000	2,880,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：史学・考古学
キーワード：東アジア・銅鏡・平安時代・五代・宋・遼・金・高麗

１．研究開始当初の背景

日本で９世紀以降、盛んに製作される瑞花双鳥鏡が、唐風から脱して日本で独自に創作されたものと広く評価されているにもかか

わらず、その形状に盛唐期（８世紀前半）の中国で流行した「八稜形」を採用していることや、韓半島で高麗期（10 世紀中頃～）とされる鏡の中に日本の瑞花双鳳鏡に酷似するものが多く存在し、なぜ日本と韓半島の間で出現にタイムラグがあるのか、といった国を越えたレベルの問題に対して、未だ全く解明されていない研究の現状があった。
また、古代東アジアの銅鏡について、研究は各国レベルで徐々に進められているが、各国相互を見渡したレベルまでには到達していない現状と、その一方で、新出資料の増加が進むなど、研究の基礎となる資料集成が充分でない実態があった。

報告者はこれまで、８世紀を中心に、東アジアにおける唐鏡の受容について、研究を進めてきた。従来、日本で確認される唐鏡が中国と比べて特定の鏡式に偏るのは、当時の日本人の好みが影響しているからだという通説が存在した。それに対し、報告者は四半世紀スパンの唐鏡編年を構築し、出土鏡を中心とする網羅的な資料分析をおこなうことで、古代日本は原料銅不足によって、唐で流行した鏡式の中からより小型の鏡式を選んだという新たな見解を導いた。同様の方法によれば、未だ様相が明らかでない９世紀以降の銅鏡についても、上記の問題を解決し、その背景にアプローチするための糸口を引き出しうると考えた。

２．研究の目的

上記の背景をふまえ、古代東アジア（９～１２世紀前後）において盛んに製作され、各国間で影響を与え合った銅鏡に焦点を当て、その背景にある各国間の文化受容の一側面を解明することを目的とした。具体的には、①研究の基礎となる資料集成の構築、②各国間で比較可能な編年の構築、③汎東アジア的視点による、各国銅鏡の様相の把握を目指した。

３．研究の方法

資料集成の構築のために、研究論文に断片的に掲載されている資料を収集すると共に、刊行図録・報告書・雑誌の閲覧や現地調査によって網羅的に資料を集め、データベースを作成する。また、各国間で比較可能な編年の構築のために、鏡形・文様・鏡胎の特徴などを組み合わせた属性分析によって各鏡式の前後関係を推測し、出土遺構などの年代観を用いて時間の定点を与えることで、同一の時期区分に基づく編年の構築を目指す。この編年にもとづいて、日本の瑞花双鳥鏡が果たして完全に日本独自の鏡といえるか否か、併行期の中国大陸の影響を受けていないのか、韓半島で確認される瑞花双鳥鏡が日本より時期が下るとされるのはなぜか、また、同じく韓半島で確認される中国鏡はどのようなものが、どのような基準で受容されているのかなど、各国の状況を比較しつつ論じるべき問題について明らかにする。

４．研究成果

（１）資料集成

日本出土の平安時代鏡、韓半島出土の高麗時代鏡、中国出土の五代・宋代・遼代・金代出土鏡について上述の方法に則り、データベース化をおこなった。特に日本の平安時代鏡については、総出土数の４割を占める栃木県日光市男体山出土鏡をはじめ、各地で出土した鏡の実測図化・写真撮影をおこなった。また日本の平安時代の鏡の様相を出土品以外からも探るべく、平安時代の古文書・記録類などから「鏡」を含む記事の抽出を行った。

（２）編年の構築

日本の平安時代鏡の編年については、内区

鳥文を分類基準とし、時間的変遷が想定される他の属性との相関の確認、さらに出土状況の良好な資料から絞り込める年代観に基づいて行った。その結果、瑞花双鳥鏡は５型式に分類できること、それらはほぼ単系統的に変遷していることがあきらかになった。

中国大陸（五代・宋代・遼代・金代）の鏡の編年については、墓誌・地券を伴う墳墓や銭貨類をはじめとする共伴遺物が豊富な事例が多く、比較的時期を絞り込みやすい。分析の結果、以下のことを明らかにした。①五代、宋代の文様について、五代では無文が、北宋代後期（11 世紀後半）には多様な文様が、北宋代末期～南宋代には無文（湖州銘）がそれぞれ主体となる。②鏡形について、五代・北宋代前期は円形が、北宋後期には円形、花形（八花形、亜字形）が、南宋代には花形（八花、六花形）が主体となる。③遼代の文様は唐鏡系文、連球文、無文が、金代には双龍、双魚文、人物故事文が主体をなす。④鏡形について、遼代、宋代ともに円形が主体となる。⑤柄鏡は北宋代後期に出現し、その後南宋にかけて盛行する。北方では発展しない。

韓半島の高麗時代鏡の編年については、高麗時代の遺跡出土鏡の半数以上が中国・日本からの輸入鏡か、それを元にした踏み返し鏡とみられ、韓半島独自の高麗鏡とあわせた一元的な基準に基づく分類・編年は困難と判断した。また、出土状況が明瞭な高麗鏡は少なくとも５型式に分かれるものの、未だ数が少なく、属性分析に基づく分類・編年が難しかった。今後の資料の増加を待ちたい。

（３）各国銅鏡の様相の把握

日本の平安時代に出現した瑞花双鳥鏡は、鏡形、意匠の共通性からみて、もっとも鏡製作が隆盛した盛唐期（８世紀前半～中頃）の唐鏡をモデルにしたと考えた。これは、瑞花双鳥鏡が日本で創出された独自の意匠を持つ鏡という通説とは異なる新評価である。そして、日本の型式変遷と、同時期の中国大陸（五代・宋・遼・金）の銅鏡の型式変遷を比較すると、両者の銅鏡文化は９～11 世紀中頃までほぼ没交渉であると推測した。11 世紀後半になると、日本へ湖州鏡の流入や、宋鏡式と称される鏡式が創出される。

中国大陸では、南方と北方（五代・北宋と遼、南宋と金）で、相互に大きな影響を与えることなくそれぞれ独自の銅鏡文化を発展させていった。また、五代、北宋、遼では唐鏡の踏み返し鏡、または唐鏡系意匠を有する鏡がみられ、日本の状況と合わせて考えると、唐滅亡後も東アジアにおける唐鏡の影響力が持続していることを物語っている。

韓半島（高麗）では、日本・中国大陸の鏡のごく一部を受容し、踏み返し鋳造による量産をおこなう。それらの構成をみると、遼代中期（11 世紀前・中葉）、宋代の鏡と日本の瑞花双鳥鏡のうち、10 世紀後半以降に盛行する鏡式が目立つ。この現象は、高麗の輸入鏡受容とそれに基づく生産が 11 世紀前後以降に高揚したことを意味する。また、輸入鏡の選択基準については、中国大陸、日本で数量的に主体を占める鏡式を中心に選択している。

この他、日本の男体山出土鏡の観察により、平安時代には奉賽品としての鏡の需要が確立していたこと、鏡製作地が複数存在したこと、既存の銅製品の鋳潰しによって銅を調達していたことなど、いくつかの可能性を導き出した。今後は、蛍光 X 線による分析等も取り入れて、これらの想定を裏付けていく作業が課題となろう。また、平安時代の文献史料を検索した結果、11 世紀以降「鏡」にかかわる記事が増加し、かつ、それまでに主体的であったシンボリックな性格（神鏡、宝鏡等）

のみならず、姿見としての実用的な機能を増していく様子がうかがわれた。

（４）本研究の位置づけと今後の課題

本研究では、日本・中国大陸・韓半島における9～12世紀に位置づけられる出土鏡を網羅的に収集・データベース化し、それを踏まえて銅鏡を通した国家間の文化交流について考察した。中国大陸では国家の興亡にあわせて多様な鏡式が出現・消滅し、日本では理想の唐鏡様式を追求した結果、全く大陸の影響を受けず、11 世紀後半まで単一の様式を固持する。韓半島では、特に 11 世紀前後頃以降、中国大陸と日本からの輸入鏡を受容し、それらの踏み返し鏡と独自の鏡式を融合させた銅鏡文化を形成していた。このように、本研究は9～12世紀にかけての東アジアの鏡を初めて総合的に比較した研究として評価できる。今後は、鏡以外の文物にも着目して、考古学的見地からは看過される傾向にあった、当該期における東アジアの文化交流についての解明が課題となろう。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① 中川あや 2010「瑞花双鳥八稜鏡の出現」『遠古登攀　遠山昭登君追悼考古学論集』p.277-288（査読無）

〔学会発表〕（計４件）

① 中川あや 2007「唐代金属器の受容　－唐鏡について－」（国際招請学術講演会 2007/11/12　国立慶州文化財研究所）

② 中川あや 2008「高麗古墳出土「唐鏡」について」（鋳鏡研究会　2008/4/25　奈良文化財研究所）

③ 中川あや 2008「飛鳥時代の工芸」（第 170 回あすか塾　2008/8/9　祝戸荘）

④ 中川あや 2009「瑞花双鳥八稜鏡の変遷」（鋳鏡研究会　2009/11/17　京都国立博物館）

６．研究組織

(1)研究代表者

中川　あや（NAKAGAWA　AYA）

独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所・都城発掘調査部・研究員

研究者番号：10393373

(2)研究分担者

（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者

（　　）

研究者番号：